

2018/07/29

「人生の目的は何？」

人生の目的とは何でしょうか。一般的には、仕事で成功すること、温かい家庭を築くことや子どもを育てること、世の中に貢献することなどが挙げられるかもしれませんが。また、自分にしかできない役割を見つけてそれを達成するためとか、逆に、自分にはこれといって秀でたところがないので何のために生きているのかが分からないと言う人もいます。しかし、聖書は、それらは目的ではなく、「ある目的」を達成するための道具にすぎない、と教えています。

「そこで、子どもたちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。それは、キリストが現れるとき、私たちが信頼を持ち、その来臨のときに、御前で恥じ入ることのないためです。」（Iヨハネ 2:28）

「子どもたちよ」とは、「クリスチャンよ」という意味です。「キリストのうちにとどまっていなさい」とは、「キリストといつも共に歩みなさい」、つまりはキリストと仲良く生きなさいということです。それは、キリストが現れるとき、つまり、私たちが肉体の死を迎えるとき、神への信頼を持っていただけるためです。肉体の死を迎え、イエス様と対面したときに、「ああ、もっとイエス様を信頼できればいいのに」とためらうことなく、天国に行けるように、キリストのうちにとどまり、信頼を育むよう、聖書は教えています。

つまり、聖書が教える人生の目的は、「神への信頼を蓄えていくこと」にあります。神への信頼だけが、唯一天国に持っていくことのできる宝です。

■神への信頼を手にするとうなるか

神を信じ救われた者は皆、死からのちに移されて、神の国に国籍のあるものとなりましたから、必ず全員天国に行けます。ただし、その時、どれほど神を信頼しているかどうかに、個人差があります。それは、この地上でどれだけ神への信頼を蓄えられたかという違いです。もちろん、それは人と比べるものではなく、一人一人が神との関係の中で、自由に蓄えていけばいいものです。しかし、この信頼は、単に天国に行くときに持って行ける財産というだけでなく、この地上で生きている間も、私たちに豊かにしてくれるものです。神は、ぜひ私たちにこの信頼を手に入れてほしいと願っておられます。

神を信頼すると、私たちは平安になります。「平安」とは、神を信頼できる心の状態のことです。とかく私たちは、家族が健康でいるとか、仕事が順調に進むとか、経済的に困らないとか、周りの環境が「無事で穏やか」であれば平安でいられると思ってしまうがちですが、この世の中は常に不安定であり、家族皆がいつも健康でいることは難しく、仕事は困難にぶつかるし、経済も常に変動します。そんな見える状況に左右されるものは「平安」ではあり

ません。聖書が教える「平安」とは、神との間に平和が築かれることです。見えない神との関係が平和であることによって、見える状況によらない「平安」が与えられるのです。

■完全な者を目指すとは

「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はずでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。ですから、成人である者はみな、このような考え方をしましょう。もし、あなたがたがどこかでこれと違った考え方をしているなら、神はそのこともあなたがたに明らかにしてくださいませ。」

(ピリピ 3:10-15)

「完全な者」とは、私たちが「肉体の死」を迎えて、天国に行くときの姿のことです。それは、「死」の支配を受けない、キリストと同じ姿です。

「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」(ピリピ 3:21)

私たちが肉体の死を迎えたら、私たちはすぐに神と同じ「朽ちないからだ」をいただきます。それは、キリストと同じように死にも罪にも支配されない完全な者となり、三位一体の神が互いに絶対的な信頼関係で結ばれているように、私たちも神を絶対的に信頼する者となるということです。

神は、その「完全な姿」を、私たちが肉体を持って生きている時から目指すように願い、もし別のものを目指しているなら、その考えを正してくださいませ。

いくら仕事で成功しても、温かい家庭を築いても、子どもが立派に育っても、自分の役割をこなし、人生を謳歌していたとしても、それらを通して神への信頼を増し加えていくことに焦点が定まっていなかったら、目的からずれた虚しい生き方をしていることとなります。

また逆に、思うような仕事に就けなかったり、願った学校に入れなかったりして、自分は何とつまらない人生を生きているのだろうと卑下していたとしても、それは大きな問題ではありません。私たちの生きる目的は、神への信頼を蓄えることですから、そのつまらなく思えるような人生をコツコツ生きていくことを通して神への信頼が増し加わっていくなら、それは素晴らしい人生となるのです。

人は、どんなことができるのか、何を残すことができたのか、自分が何をしたかということにこだわります。パウロもそうでした。パウロは生まれを誇り、肩書きを誇り、行いが完璧であることを誇っていました。彼はエリート中のエリートです。しかし、キリストに出会い、神への信頼を増し加え、平安を得る素晴らしさを知り、今まで誇ってきたものを、損だと思うようになりました。なぜなら、そのようなものに心を奪われていると、神が下さる平安にたどり着けないからです。

「ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。」(ピリピ 3:4-8)

■すべての出来事を神と自分との関係で見る

人生の目的は何か、自分の中でその焦点が定まると、人生の中で起きる様々な出来事を、イエス様と自分の関係として見るように変わります。

例えば、誰かに無条件で受け入れてもらい親切にしてもらった時、ただ単に、その相手の行為をありがたく受け取るのではなく、このことを通して、「ああ私はこの人を通してイエス様の愛を学ばせてもらっているのだ」と思うようになるのです。

「いつも主にあって喜びなさい」(ピリピ 4:4)とは、何事もイエス様と自分の関係に置き換えて喜ぶ、ということです。神への信頼を育てているという自覚があれば、すべてのことを神と自分の関係として捉えるようになり、神への信頼が自然と増し加わっていくようになるのです。

また、つらい出来事が起きた時、例えば、誰かに悪口を言われた時など、人生の目的は神への信頼を増し加えていくことだという自覚があれば、その人は自然と、イエス様に目を向けます。イエス様も人々から悪口を言われ、ののしられ、そして十字架にまでつけられましたが、イエス様がそのような思いをしてくださったのは、今私が味わっているつらさを共感してくださるためだったんだと考えることができるようになり、イエス様は私の味方で、私の苦しみを分かってくくださる、私は本当にイエス様に愛されている、という実感を持つことができるようになります。こうして、悪口を言われたという出来事も、イエス様の愛を学ぶためのきっかけになった、と感謝することができるようになるのです。

■達しているところを基準に歩む

しかし、現実の問題にぶつかった時、すぐに神と自分の信頼関係を増すためのものだと感謝して受けとめることは難しいものです。そこで、パウロは、一つ条件を見つけました。

「それはそれとして、私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです。」
(ピリピ 3:16)

パウロが語る条件とは、すでに達しているところを基準とするということです。人生の目的は神への信頼を増し加えていくことだと分かっているにもかかわらず、問題にぶつかってただ落ち込んだり、人間関係が行き詰まって人を赦せなかったりする、そんな自分を素直に認めて、そこを基準に歩んでいくということです。

「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」
(ピリピ 4:6-7)

私たちは、つらい出来事に会った時、神への信頼云々より、何とかそれを解決してほしいという思いが真っ先に浮かぶものです。どんなことでも感謝して受けとめ、心に平安が来ればいいのですが、実際はそうはいかない私たちのことを、神は誰よりもご存じです。ですから、何にも心配しないで問題が解決するように祈りなさい、と言ってくださいます。そうやってありのままの自分を神に正直に告白する時、神はこんな私を受けとめて、願いを聞いてくださることを体験し、私たちの心は、言いようもない平安に包まれます。自分の心に素直になればなるほど、神が受け止めて下さることが分かるようになるのです。

■あらゆる境遇に対処する秘訣

「しかし、私の兄弟、同労者、戦友、またあなたがたの使者として私の窮乏のときに仕えてくれた人エパフロデトは、あなたがたのところに送らねばならないと思っています。彼は、あなたがたすべてを慕い求めており、また、自分の病気のことがあなたがたに伝わったことを気にしているからです。ほんとうに、彼は死ぬほどの病気にかかりましたが、神は彼をあわれんでくださいました。彼ばかりでなく私をもあわれんで、私にとって悲しみに悲しみが重なることのないようにしてくださいました。」(ピリピ 2:25-27)

エパフロデトは、ピリピ教会から支援金を持参して、パウロのもとに送られてきた使者です。ところが、彼はパウロのところに滞在中、病気になってしまいます。病気の人を抱えて宣教活動に励むことは難しいことです。エパフロデトは、使者であるにもかかわらず、かえってパウロの足を引っ張ることになってしまったと心苦しさを覚えたことでしょう。それぞ

れが、複雑な心境で、この病がいやされることを祈った結果、死の淵をさまよったエパフロデトはいやされ、パウロはこの経験を通して、神は祈りに答えてくださる方だという信頼を増し加えました。そうした出来事があったので、パウロはピリピの教会の人たちにこう書き送っています。

「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にある道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」（ピリピ 4:11-13）

パウロがどんな境遇の中にあっても満ち足りることを学んだのは、困難に出会うたび、正直な自分の気持ちをさらけ出し、神に助けられる経験を積んできた結果です。パウロが学んだあらゆる境遇に対処する秘訣とは、神への信頼を増し加えていくという人生の目的を持っていることであり、その信頼を手にするために、どこまでも自分の気持ちに正直になるということなのです。

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」（ローマ 8:28）

「益とされる」とは、自分の失敗やマイナスと思われる出来事が、結果オーライにされることを指すのではありません。確かにそのような結果になることもあります。パウロが言いたいのは、神への信頼を増し加えるために役に立つ、益となるということです。いくらマイナスな出来事がプラスになったところで、神への感謝や信頼に結びついていないのなら、益とされたとは言わないのです。逆に、マイナスの出来事がプラスにならなくても、神への信頼に結びついているなら、それは益とされているのです。

実際パウロは、自分の病のために祈りましたが、癒やされませんでした。しかし、そのことを通して、神への信頼が増し加わったので、彼の病はまことに益とされたのです。神は全てのことを働かせて神への信頼に役立つようにしてくださるので、どんな境遇も神への信頼を増し加えるための道具になるのです。

この世の中で一番信頼する力を持っているのは、赤ちゃんです。赤ちゃんは、自分の無力さを認め、ただ頼ることしかできません。私たちはこの赤ちゃんのように、ただ神の前に正直な自分をさらけ出し、そして、神に助けられ、神への信頼を育てていけばいいのです。人生の目的は神への信頼を増し加えていくことであることを自覚し、すでに達しているところを基準に歩いていきましょう。